

偽書もまた「史料」なりき。——馬部隆弘『椿井文書』に寄せて——

書評

馬部隆弘 『椿井文書——日本最大級の偽文書』

(中公新書、二〇二〇年)

室井康成

一 現在を拘束する空想の地域史像

二〇二〇年のNHK大河ドラマは、明智光秀を主人公とした『麒麟がくる』である。光秀の前半生は史料的にはほとんど不詳だが、彼が天正一〇年(一五八二)の「本能寺の変」で主君・織田信長を弑逆し、同僚家臣の羽柴秀吉と戦って負けてから死ぬまでの数日間の行動も、諸説芬々として歴史学的には正確なことはわかっていない。

そうした中、最近発見が報じられた滋賀県大津市の石山寺の所蔵文書には、本能寺の変直後、明智軍と信長方

の部将とが琵琶湖を舞台に船戦を展開したことを窺わせる記述があるという。そのため同文書発見のニュースは、光秀をめぐる歴史の空隙を埋める史料として注目された(二〇二〇年七月四日配信『毎日新聞』ウェブニュース)。

だが、本稿で取り上げる馬部隆弘著『椿井文書——日本最大級の偽文書』(以下、本書)を読了後にこの種のニュースに接すると、刮目すべき新発見の史料に胸躍らされる反面、つい「それは偽文書なのではないか」と心配してしまう自分を発見する。もちろん件の文書は今後、専門家の手により考証が進められ、遠からず記述内容の評価が明らか

にされるだろうが、私をしてそう勘繰らざるを得なくさせるほど、本書で提起された問題は深刻なのである。

椿井文書とは、徳川時代後期に、現在の京都府木津川市椿井出身の椿井政隆（一七七〇—一八三七）が創作した偽文書の総称である。その多くは中世文書に見せかけて作られており、一見すると後世の識者は本物の中世文書であると信じてしまう程度のクオリティである。しかも件数が半端なく多く、種類も書簡や家系図から神社の由緒書きに至るまでバラエティに富む。さらに創作者の椿井は、文書によって筆跡を使い分けたり、当時から識者が多くいた都市部での偽文書作成は避けるなど、一連の行動は狡猾にも見える。

ただし、かかる偽文書自体は珍しいものではない。識字率が上昇し、庶民レベルでも過去に対する関心が高まった近世後期には、全国各地で似たような偽文書が量産された。ところが椿井文書の問題点は、椿井政隆という一個人による空想の歴史像が、彼が偽作した多数の文書とともに、現在の大阪府・京都府・滋賀県・奈良県といった関西地方中北部の広範囲において、かなりの程度で定着していることである。

換言すれば、畿内の中世社会に対するイメージは、この椿井文書の記述内容に拘束されている蓋然性が高く、先般

発見された本能寺の変に関わる新発見史料の報道を受け、これを私が椿井の創作した偽文書ではないかと疑い、かつそうではないことを祈った所以もこの点にある。

本書は、この椿井文書がいかなる史的背景のもとで創作され、どのようなかたちで後世に影響を与えているのかを緻密に検証した労作である。もし本書の説くところを全面的に受け入れた場合、畿内の中世史像はドラスティックな変更を余儀なくされるだろう。

以下、本書の内容を概観してみたい。

## 二 椿井文書が求められた背景

本書によると、椿井文書が求められた特有の時代背景は二段階あるようだ。一つは、同文書の偽作者・椿井政隆が生きていた近世後期。もう一つは、戦後の自治体史編纂ブームの時期である。とくに後者が問題で、畿内エリアの市町村史の資料編では、同文書が中世文書として収載されているケースが少なくないらしい。

要するに、椿井文書に基づく空想の地域史が行政により半ば公認されているのである。第一章「椿井文書とは何か」では、同文書の記載内容が「史実」として定着していく過程が示され、本書の狙いが述べられる。

偽書もまた「史料」なりき。(室井)

他方、前者については、第二章「どのように作成されたか」において、同文書が量産・拡散した理由が、いくつかの具体例を示しつつ詳述されている。

たとえば、樺井政隆が出没し、偽文書を作成した地域には、村どうしの境界争いなど「伝統的な利権」が絡んでいるケースが多いという。つまり、かかる村争いが訴訟に持ち込まれた場合、当事者の村のうち、どちらが紛争領域に對しより古い時代から関わりをもっているかを立証しなければならぬ。その際、村の来歴を記した同時代以前の古文書が証拠として採用される。この過程で、言わば「裁判資料の偽造」が行なわれることもあったようだが、それに樺井が関与していたというのだ。

本書では、その具体例の一つとして、現在の大阪府枚方市東部にあった津田村と穂谷村との間で展開された村争いが紹介される。主な争点は、両村の境界付近にあった「津田山」の帰属問題であった。

この論争は、樺井が登場する一〇〇年近く前から交わされておき、津田山の頂上付近にあったとされる中世城郭(津田城)が津田村との由縁で説かれたことで、一度は京都奉行所で津田村勝訴の判決が下された。だが、そこから長い年月をかけて穂谷村の巻き返しが始まり、その過程で樺井政隆が突如登場する。ここで樺井は「氷室本郷穂谷来因之

紀」ほか複数の文書を偽作し、穂谷村には「津田城」よりもさらに古い時代に、朝廷へと氷を供給する施設「氷室」があったかのような記述を行なった。つまり、朝廷との距離感の近さから、当該地域の支配権をめぐる穂谷村の正当性を主張したのである。

結論からみると、この論争は明治期まで尾を引くことになるが、ここに樺井が関わったことによる影響は、彼が同地に残していった偽文書と、それまで伝承に過ぎなかった「氷室」が実在したとする認識の定着であろう。

なお本書では、樺井がこの論争に加わる以前に津田村が主張した「津田城」もまた、津田村側による捏造であった疑いが強いことが指摘されている。著者によると、津田山にある城郭遺構らしきものは、実際には山岳寺院の痕跡である可能性が高いという。ところが、『枚方市史』などには「津田城」が市内の史跡として明記されている。偽文書が無批判に受け入れられた典型であろう。

このように、実際には存在しない史跡を存在したかのように描くという点では、樺井はもっと大きな仕事をしている。それは「日本史の教科書レヴェル」といってよい著名人で、古代に朝鮮半島の百濟から日本へ漢字を伝えたときれる「王仁」の墓の考証である。

やはり現在の大阪府枚方市にある王仁の墓は、徳川時代

中期の享保年間に編纂された『五畿内志』において、はじめて比定されたものである。しかしながら、その根拠が「おに墓」という呼称からの単純な類推である点や、自然石を置いただけという粗末な形態などから、これを王仁の墓と断じたことには当時から批判があった。そこに椿井が現れて、さも『五畿内志』の編者らが典拠としたような古文書を偽作するのである。それが後世、王仁の墓の存在を傍証すると考えられてきた椿井作「王仁墳廟来朝記」なる偽文書である。

つまり、椿井文書が求められたもう一つの背景として、従前の地誌等の記述にみられる矛盾点の解消があった。要するに、信憑性の乏しい既存の文献の補強材として椿井文書が効力を発揮したのである。問題は、このような事態が、椿井の生きた時代に畿内の各地で起きており、かなりのケースで椿井が関わっていたとみられることである。

今日、件の「王仁の墓」は大阪府の指定史跡となっており、王仁の出身地とされる韓国からの来訪者も少なくないという。椿井文書の拭い難い影響力たるや、推して知るべしであろう。

### 三 椿井政隆という人

ところで、椿井政隆の人となりについては判然としない。しかし、残された一連の文書から、ある程度は想像できる。このことについて、第三章「どのように流布したか」・第四章「受け入れられた思想的背景」の記述をもとに考えてみたい。

前述したように、椿井は村の境界争いの場によく現われ、一方の当事者に有利な古文書を偽作したとみられる。この点に限っていえば、依頼主からいくばくかの金品が支払われたかもしれないが、そのような想定が可能な例は、膨大な椿井文書の一部である。多くは、椿井が好んで自主的に作成していたようで、決して儲かる仕事ではなかったろう。こうした椿井の一面について、著者は「悪意というよりも、遊び心をもって自己満足のため」に偽文書を作成していたと推測し、その作業は「趣味と実益を兼ねたものであったが、彼個人としては前者に重きを置いていたのではなからうか」との見通しを示している。事実、椿井を「好事ノ士」と評した同時代の識者もいた（坂本林平「楓亭雑話」）。それでも、椿井の行動には目的があったはずだ。この点を窺い知れるのは、著者曰く「椿井文書のなかでも最も研究者に受け入れられてきた最高傑作」とされる『興福寺官

偽書もまた「史料」なりき。(室井)

務牒疏』と、椿井が式内社の同定作業にこだわっていたという事実の二点である。

このうち『興福寺官務牒疏』は、奈良の興福寺と末寺の關係が記されたもので、嘉吉元年(一四四一)の作成であるかのように偽装されている。本来、中世段階での興福寺は事実上の大和国守護であったが、同文書には、大和以外の近畿地方にも末寺が多数あったと記されており、とくに現在の滋賀県での事例が多い。著者によると、これは椿井の活動範囲とほぼ合致するという。のちに椿井は、自らの家系を大和国平群郡の出自とし、興福寺の官務家の末裔を自称するようになるが、これらも同文書への信憑性を高めるための操作だったように映る。

また、近世段階ではすでに不詳となりつつあった式内社の位置について、椿井が現地を訪れて偽文書を作成し、その同定作業を行っていた形跡も顕著である。そうなること、今日近畿地方の各地で興福寺や式内社との關係があることされる古跡の類は、椿井の手が入っていないかどうかの検証が必要となる。

#### 四 信じてしまつたことの困難

椿井の一連の行動を見ると、近畿一円での前近世期における伝統的権威の痕跡を掘り起こし(要するに捏造なので)、再定置しようとする意図が働いていたのではないかと考えてならない。第四章「受け入れられた思想的背景」では、ここまで椿井文書が流布した理由が考察されている。

詳しい学問的系譜は不明であるものの、椿井自身は国学的知識が豊富だったことは確からしい。一連の偽文書の執筆は、そうした知識に裏付けられたものだが、これらを受容した同時代人にもまた国学が普及しており、とくに勤皇思想は「武士化を望む富農の身分的上昇志向」と結節した。識字率が向上し、郷土史に対する関心が高まりつつあった時代にあつて、地元と伝統的な神社との歴史の結びつきを傍証してくれる椿井文書は、椿井の歩いた地域の人々にとつても、ありがたいものだったろう。

椿井文書が、そうした郷土愛的自尊心の補完材料としてのみ機能していたのであれば特段の問題はない。だが後年、それらが史料批判を経ずに中世・古代の文書として学術研究で参照され、存在しなかった史的事実や古跡についてアカデミズムがお墨付きを与えてしまったことが、事態を一層複雑にした。第五章「椿井文書がもたらした影響」・第

六章「椿井文書に対する研究者の視線」では、その問題系が詳述されている。

前述した王仁の墓をはじめ、式内咋岡神社（京都府京田辺市）、橘諸兄・美努王の墳墓（京都府井手町）、世継の七夕伝説（滋賀県米原市）など、椿井文書が初出か、または補完しとみられる古跡や伝説が、あたかもそれ以前からあったかのように認識されている事例は畿内の各地に散見される。だが、たとえそれが学術的に否定されたとしても、いったん本物だと信じてしまった人々の認識を覆すのは至難の業である。

著者によると、椿井文書のもつ問題性は、京都大学を中心とした戦前のアカデミズムでは共有事項であったが、第二次世界大戦での日本の敗戦を挟み、京大の歴史学の教員がパージもしくは他大学へ転出した結果、後学に正しく伝わらなかつたという。そして、まもなくはじまつた高度経済成長の波に乗り、各地で自治体史の編纂が進められると、その史料の価値が精査されないまま、一連の椿井文書は古代・中世の文献として収載され、さらに拡散していったという。

研究者の中には、椿井文書の原典に当たらず、活字となつた当該文献を用いて研究成果を世に問うてきた者もいたようだ。この点について著者は、椿井文書の問題性を提示す

史苑（第八一卷第二号）

るかたちで疑義を呈してきたが、本書で描かれたそのリアクションには嘆息しか出ない。"いったん本物だと信じてしまった人々"の中には、実はプロパーの歴史学者も含まれていた。図らずも本書は、椿井文書という近世文献を鏡とすることで、アカデミズムの固陋性をも玲瓏と映し出したのである。

## 五 戦後歴史学の陥穽、愛すべき近世知識人の「発見」

私見によると、本書が白日のもとに晒した最大の問題は、偽文書の危険性そのものよりも、戦後アカデミズムにおける歴史学教育の陥穽であろう。つまり、戦後歴史学において椿井文書が何の疑いもなく受容されてきた要因の一つには、古代・中世・近世・近代のように時代史ごとに専門家養成を行なってきた歴史学の教育システムがあつたといえる。

たとえば、中世を専門とする歴史学者が、同時代の歴史的事項を記した椿井文書にまんまと騙されてしまったのも、近世文書に対するリテラシーを現行の教育制度の中で十分に高めることができなかつたからであろう。逆に、著者が椿井文書のいかがわしさに気付いたのは、同氏が大学院生時代に中世と近世の両方のゼミに所属し、それぞれの

偽書もまた「史料」なりき。(室井)

時代の文書に対する知見を深めてきたからである。

以上のように、著者は本書で一連の椿井文書の史料性を強く否定し、返す刀で同文書を無批判に利用した研究の正当性を厳しく問い質すものの、そもそもその問題を作った椿井政隆本人には温かなまなごしを向けるのである。そして著者自身が、椿井と同文書に対する愛情は「他のどのファンにも負けない」とまで宣言する。正直に告白すると、私自身も本書を通読し、すっかり椿井に魅了されてしまった一人である。

著者も述べているが、ここまで大量の偽文書を作成・拡散させることができた椿井の労力の源泉は何であったのか、今から考えると不思議であるし、もしかすると椿井文書の最大の謎なのだが、それは椿井自身が、その偽作の過程を楽しんでいたからこそ可能だったとしか思えないのである。つまり、椿井は偉大なるディレクターであり、近世特有の「知」のありようを体現した人物として、価値ある学術的検証の対象でもあるのだ。

自分の好きなことを、他人から懇願されて実践し、しかも感謝されるという醍醐味は、一度味わってしまうとなかなか忘れられるものではない。近世の日本社会は、こういうタイプの知識人を折々生み出したが、椿井の場合は、そのスケールが突出して大きかったのだといえる。そうした

一面に惹き付けられるのは、著者や私だけではあるまい。そう考えると、本書の何よりの成果は、椿井政隆という、このサーピス精神旺盛な稚氣愛すべき近世知識人を「発見」したことなのかもしれない。

(本学兼任講師)